

住民目線で町の様子を伝えたい・親しみのある紙面を目指して

# 広報協力員制度が 10周年を迎えました

毎月、町の情報誌として発行される「広報あいしょう」。その中に、一般の町民自らが「広報協力員」となり取材・執筆する個性溢れるページ「愛ひきやく便」があります。

平成20年、3名の広報協力員から始まったこの制度が昨年で10周年を迎え、記念の座談会が開催されました。

## 住民目線の「愛ひきやく便」

「愛ひきやく便」の目的は、地域での行事や地域で活動されている人など、町の身近な話題を読者の皆さんに伝えること。広報協力員のみなさんは、町民の目線から町の情景を伝えるため、日々情報収集を心がけています。

紙面の制作はテーマ設定から。「愛荘町にまつわること」と言えば簡単ですが、町内だけでも地域の行事・活動といった身近な話題は多岐にわたります。その中から、自身が興味を抱いたことや他の町民の皆さんに知ってもらいたいことを選び、テーマにします。

テーマに基づいた記事の構想が決まれば、早速取材です。現地に足を運び、テーマに関わっている方々から直接話を伺います。直に話したり、体験をすることで、取り組みにかかるとの想いをひしひしと感ぜられ、記者自身も数々の取り組みに共感するところや考えるところが生まれると言います。

取材後は内容を文章に起こし、撮影した写真と共にレイアウト。読んだ人がその場面を思い描けるような紙面を目指して記事にいきます。

さらに、住民目線の記事にする

ために実施しているのが月1回の広報協力員会議です。編集会議として実施されるこの会議には、みらい創生課の職員も加わり、文章の表現や写真、写真に入れるキャプションに至るまでを広報協力員全員でチェックし、誰もが読みやすくわかりやすい「愛ひきやく便」の紙面にしていきます。

## 「知ってほしい」という想い（座談会から）

平成30年度に広報協力員として活動しているのは6名。座談会では、制度開始当初に広報協力員であった1名を加え、7名で意見が交わされました。

活動を始められた理由は、「元々新聞部に入っていたりと文章に関わる事が多かったので、読者投稿をしていた事もあり、自分の想いを紹介したくて応募した」故郷について紹介したいなど様々でした。きっかけは様々でも、共通するのは「知ってほしい」という想いです。

例えば、町内では、行政が紹介しきれない様々な行事・活動が実施されており、主体となる方々は取組を町内の皆さんに知ってほしいと思っておられます。この純粋な「知ってほしい」の想いに、「愛ひ



座談会の様子。10年間の活動を振り返りました。

## 広報協力員さんからのコメント

あんなこと、こんなこと伝えたいな！

Q v a

この10年間、知的好奇心をエネルギーにして、愛ひきやく便で地元の長野を皮切りに愛荘町の伝統的活動、教育あるいは行政に関する地域の人たちの取り組みを拙い文章ながら届けられたと思います。取材に際し、初対面の方からもお話しが訊けたのは、愛荘町の皆さんに広報が認知され協力員への支援を頂いていたからです。大きな励みになりました。

地域の集まり、友達との会話の中から、記事のテーマが浮かびます。鈴鹿山脈に隣接する東部の方々が長年にわたり取り組んでこられた山林の維持管理のご苦労は、愛荘町の西部地区では、獣害と結び付けることができません。同じ町内でも生活環境の違いは、言動に表れ、相互理解のための情報が必要になります。広報はその役割を担う情報媒体です。

愛ひきやく便のコナーは、行政のお知らせとは異なり、広報協力員の個性が記事に反映されます。広報活動で伝統的行事が受け継がれて来た背景を知ったり、真摯な取り組みに感銘を受けることも多々ありました。インタビューの最中あるいはカメラを構えて、この場面上手く伝えることができるかと考えを巡ら

します。記事に起こし紙面のレイアウトが整うと一段落です。編集会議では、自分では気付かない不備を皆さんのコメントで修正され、愛ひきやく便は広報としての体裁が整います。

当時の紙面を読み返すとインタビューの情景が思い起こされ、相手の方の名前が浮かびます。広報を介して知り合えた方がたくさんおられます。使命感と共に若干の反省が次の紙面づくりに繋がります。

広報への係わりは、まずは自らの温故知新への関心です。そして感動した愛知高校音楽コースの演奏会、中学校吹奏楽部の益々の活躍が楽しみになります。取材にご協力頂いた方々に感謝申し上げます。

## 広報協力員制度10周年、おめでとうございませう

PANDORA

私は、協力員制度が発足した当初から参加させて頂き、当時は子育て中という事もあり、主に子どもに関する記事を書かせて頂きました。

町の広報は公からの発信、お知らせ等々が主ですが、協力員の書く記事「愛ひきやく便」は、協力員それぞれの目線と、各自が興味のある内容取材し記事におこしているの、バラエティ豊かな記事になっていくのではないのでしょうか。

私自身、広報活動のなかで、普段の暮らしのなかでは体験できないような事に触れたり(例えば、図書館の奥にある書庫を見せていただいたり…)、また、日

常に出会う機会のない皆さんの方々とお話をさせて頂きました。それは、私自身の平凡な毎日のなかでの貴重な経験、潤いとなりました。

他の協力員さんの書いた記事を読み、町内でこういう行事や場所があったんだわ。町の取りくみで、こういう制度があるの?と、初めて知るような事も多々ありました。

職員とは違って、一住民の協力員であるから知っている行事や書ける内容もあるのではないのでしょうか。

町の広報なので、おのずと取り上げる内容も限定的になってしまいがちですが、掘り下げていけば、記事にする材料は日常生活のなかにたくさんあるんだなと、最近実感しています。

町民の皆様からも、こういう内容を取り上げて欲しい、取材して欲しいというアプローチがあってもいいかもしれませぬ。

## 座談会を終えて

瀬戸きりん

家のポストに広報あいしょうが届くと、今月は何かな?と開いてみる「愛ひきやく便」。

気になる理由は、情報誌の中の読み物として、公の中の個として、良い意味で異質なページだからだと思います。そして「へえ、知らなかった」と心動かされる事が多く、いつも楽しみにしています。さて、そんな読者だった私が、今年も書く側として参加することに。そして今年10周年というメモリアルな年でもあり、今回の座談会にも参加させてい

ただけることになりました。座談会に際して、これまでの誌面をまとめた冊子を読んだくと、100以上の記事がズラリと並んで、ちょっとした本みたい。これが町の広報誌のなかから生まれ10年間続いたこと、とても素敵だなあと感じました。

座談会では、まず皆さんが協力員を始めたきっかけをお聞きして、なるほど。学生時代に新聞部だったり、字の広報誌を作られていたり、新聞に投稿されていたり。定例会に参加させていたただくようになってから、協力員の皆さんの「記者」としての熱意をひしひしと感じていたのですが、そうした素地から来たのでした。

ペンネームを使うことについての議論もおもしろかったです。ペンネームを使うと、読者に知人も多しな自由で書くことができますが、反応はもういづら。本名であれば、知人から感想をもらうこともできます。うーん、私は「同じ町に住む誰か」が書いているということも、愛ひきやく便の魅力のひとつだと思つたのでペンネーム派です。

もしも広報誌がなかったら…という話題にもなりました。ネットも便利ですが、月に一度ポストに届くというアクセサも大事ですよ。私にとつて広報誌は、「知って良かった!」をくれるもの。それはスーパーの特売チラシを見るような「お得」という価値観とはちがって、「おもしろい」という価値観です。そう、町のことを知るのはおもしろい。私もそう思っていただけのような記事を書けたらなあと思います。